

2024年新春/1月学習会の案内 第59回「資本論を読む会」

日時1月22日（月曜日）午後6時30分 Zoomで開催

DAS KAPITAL



今回は、「第3節 相対的過剰人口または産業予備軍の累進的生産」

[岩波文庫(三)p205-224]。

今年最後の12月「資本論を読む会」はクリスマスの夜にもかかわらず、ほぼフルメンバーの11人が集いました。「年末だから…」(?)。前回の第1節は「資本の組成が不変な場合」に、資本蓄積の欲望で、労働者に対する需要が供給を上回ると、労働賃金が騰貴することなどを見てきましたが、今回は、資本の蓄積運動が可変資本部分の「相対的大きさを減少させる」ことの意味を考えるとこの三つの単語が全体を通じたポイント。

ずっと後の第3巻にならなければ詳述されない「信用制度、競争と信用」「株式会社」(p202-203)なる言葉も登場してきて戸惑われます。が…皆さん、これまでの勉強の成果

でしょうか!?!「結論部分の、言っている意味は大体分かるのだが、マルクス独特の表現が難しい」といった、いつも出てくるような感想が今回も…。結論部分とは最後の3行「かくて、一方では、蓄積の進行中に形成される追加資本は、その大きさに比して、ますます少ない労働者を牽引する。他方では、周期的に新たな組成をもって再生産されるもとの資本は、従来使用していた労働者をますます多く反発する。」(p205)ですが、この下線部分の表現は少し難しかったですかね。

次回の第3節は「相対的過剰人口」「産業予備軍」というゾクゾクするテーマを取り扱います。

「読む会」が終わっての忘年会も、政治の話(自民党の派閥と裏金問題、非自民結集のあり方等)から職場の問題などで盛り上がりました。皆様、良いお年をお迎えください。

☆「資本論を読む会」の最初からの資料は下記ホームページでご覧になれます。

◎ <http://socialistho.cafe.cocacn.jp/>「資本論を読む会」オープン・コーナーにあります。

レポーターから -Takちゃん

第二十三章 資本主義的蓄積の一般的法則

第二節 蓄積とそれに伴う集積との進行中における可変資本の相対的減少

経済学者は「賃金上昇の要因」は「蓄積の増大とその速度」だと言う。前節は(この不十分な説が正当である)「技術的組成が不変」である蓄積を扱った。しかし、蓄積はさらに進み、この説は蓄積中に、「社会的労働の生産性の発展」が蓄積の最も強力な槓杆となる点が必ず現れ、使用する生産手段の量に比べて労働量が減少する「技術的組成」の高度化が資本の「価値組成」に反映する。しかし、「価値組成」の変化は「技術的組成」の変動をただ近似的に示すだけで、「価値組成」変化より「技術的組成」の量的変化のほうが遥かに大きい。

蓄積により可変資本は相対的には減少するが、絶対的に増加することが排除されるわけではない。

「資本主義的商品生産という特殊な形態」は、それ以前の「手(個別的私有)による商品生産」という「歴史的基礎」での、「本源的蓄積」という資本蓄積を前提として成立する。

社会的資本の増大は、多数の個別資本の増大で行われ、結果として蓄積と集積は「分散」するが、その反作用として、個別的独立の廃業・資本家の収奪・多数小資本の少数大資本への転化という、牽引・本来の「集中」が起こる。集中の最も強力な「競争」と「信用」の2つの槓杆は、「集中」の素材である個別資本も増加させる。しかし、集中の進展は、決して社会的資本の大きさの積極的増加には依存せず、このことが、「拡大規模での再生産」である集積と集中を区別する。集中は「既存資本の単なる配置変更」でな

「集中」の諸経緯に関わらず、その経済的作用は同じである。規模拡大は多数人の全労働を組織し物質的推進力を発展させ、「個別的私有」の「習慣的」生産過程を「社会的・科学的」な生産過程に、また、この「蓄積効果の促進」と同時に、「資本の技術的組成」の変革・労働の相対的需要の減少を促進する。

社会的蓄積の進展を語る場合には、集中の作用が暗黙のうちに含まれている。

追加資本は、一般的に産業上の改良の媒介物となるが、その原資の更新期には、労働需要が「絶対的に」減少し、当然、「集中」でより大量となった資本の更新期には、減少はより甚だしくなる。結果として、一方では新たな追加資本は相対的に少ない労働者を「牽引(雇用)」するが、他方では、周期的に新たな技術的組成で更新される(追加資本よりはるかに大きな)原資本は、既存労働者をますます多く「反発(解雇)」する。